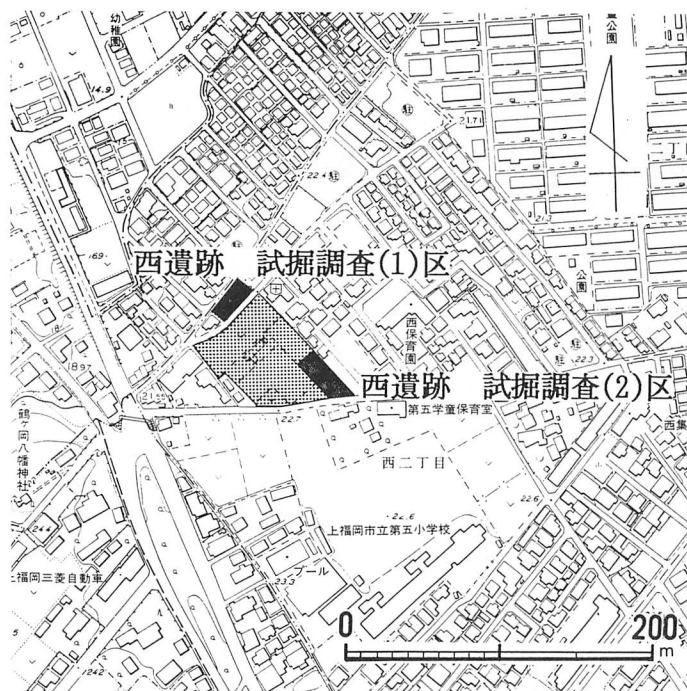


	(遺跡名・調査の種類)	(所在地)	(調査面積)	(原因)	(調査期間)
1	仲3丁目 試掘調査	仲3-1-1	831	共同住宅建設	4/6～4/14
2	松山遺跡 試掘調査(1)	松山2-6-22, 23	567	駐車場敷設	4/17～4/24
3	西遺跡 試掘調査(1)	西2-1845	200	共同住宅建設	4/24, 25
4	上福岡貝塚 試掘調査	福岡2-1500-8	737	工場棟増設	5/2
5	松山遺跡 試掘調査(2)	松山2-4-7	571	駐車場敷設	5/6～5/11
6	松山遺跡第12次調査	松山2-3-11	393	個人住宅建設	5/12～5/20
7	松山遺跡第13次調査	築地3-2-18	234	個人住宅建設	5/18～5/30
8	松山遺跡第14次調査	松山2-5-17	432	個人住宅建設	5/21～5/30
9	松山遺跡 試掘調査(3)	松山2-3-31, 13	871.9	宅地造成	6/12～6/18
10	松山遺跡 試掘調査(4)	築地1-3-17	998	共同住宅建設	6/3～6/11
11	北野遺跡 試掘調査(1)	大原2-2079-1	617	駐車場敷設	6/19～6/22
12	滝遺跡 試掘調査	滝1-2-14	400	倉庫建設	7/6～7/8
13	北野遺跡 試掘調査(2)	北野2-1809-1	138	個人住宅建設	8/6
14	福岡新田遺跡 試掘調査	中福岡3 6 2	998	共同住宅建設	7/17～7/22
15	駒林遺跡 試掘調査	駒林字南原3 4 1	987.6	共同住宅建設	9/16～9/18
16	長宮遺跡第18次調査	長宮2-5-3	914.8	共同住宅建設	10/6～12/2
17	松山遺跡 試掘調査(5)	松山1-4-32	78.4	共同住宅建設	10/30
18	富士見台横穴墓 試掘調査	新田2-1-25	1112.5	共同住宅建設	11/18～12/1
19	西遺跡 試掘調査(2)	西2-2068-2	559.2	共同住宅建設	12/3～12/9
20	上野台3丁目 試掘調査	上野台3-1504-2, 1108-2	1915.2	図書館建設	1/12, 13
21	長宮遺跡第19次調査	長宮1-2-21, 35	467	駐車場敷設	12/17～1/22
22	川崎遺跡 試掘調査	川崎字山向9-5	168	店舗付住宅建設	2/18, 19



第1図 西遺跡調査区位置図 (1/5000)

次調査区の隣接地であって1次調査で確認された集落跡がどこまでつづくのか確認するために行なった。

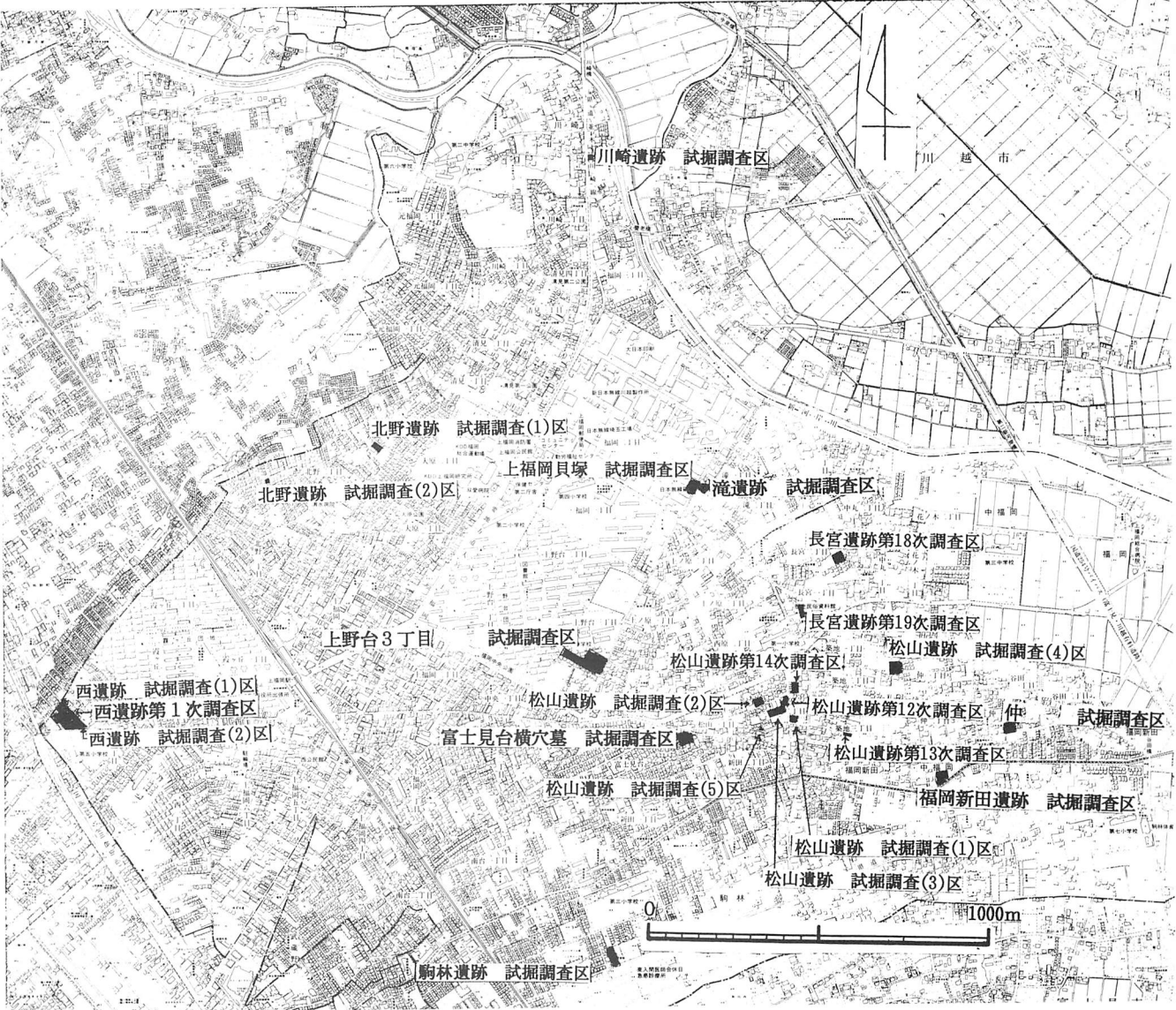


西遺跡 試掘調査(1)作業風景 (北より)

Ⅱ 西遺跡の試掘調査

西遺跡は、北側に川越江川が西から東方向に流れ、比高差およそ5m程の崖線になっている台地上にあって縄文時代中期の土器片が散布していることで早くから知られていた。

今年1月中旬からの上福岡市教育委員会による試掘調査と3月中旬から4月にかけての上福岡市遺跡調査会による本調査で縄文時代中期の前半を中心とした時期の住居跡が18基、土坑60基前後、集石17基遺構が確認された(西遺跡1次調査)。今回の試掘調査区は、2箇所とも1



第2図 遺跡位置図 (1/20000)

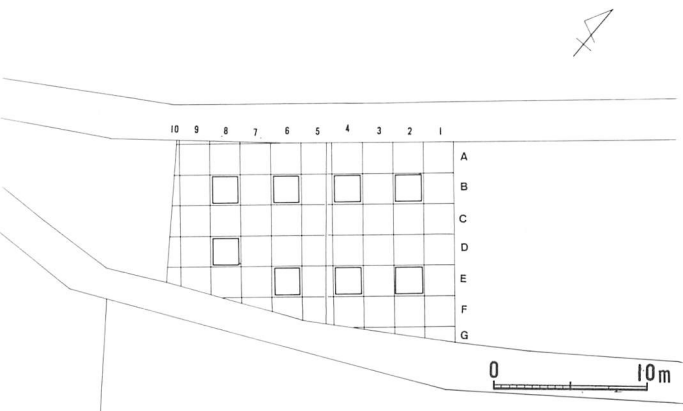
●西遺跡の試掘調査(1)

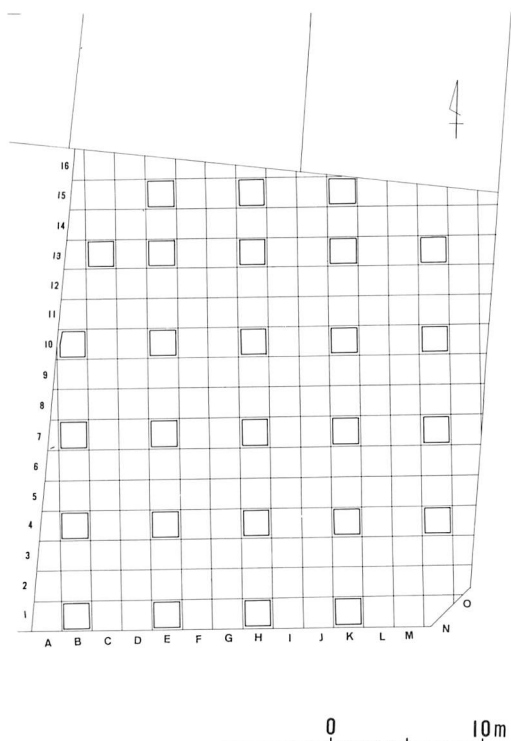
当該調査区は1次調査区の道路を隔てて北側に隣接している。地目は畑地であるが、現状は、駐車場代わりに使われている雑種地である。共同住宅に転用するという開発の申請があったので事前の試掘調査が必要であると土地所有者に連絡を行なった。調査は4月24日に東側土地境界を基準とし、2m間隔で北から南方向にA～G区、東西方向に第1～10区の方眼を設定した。B～2区より西側へ向かって1区おきに表土を除去し遺構の精査に努めながら、ローム面まで掘り下げようと試みた。D区列についても同様に1区おきに表土を掘り下げた。表土には5から10大のロームブロックが含まれており、黒味があった粘性をもつ土、コンクリート塊や駐車場に用いられる砂利などによく似た石もまじっていた。ローム面は5cm以下のロームブロックを敷きつめたような状態

になっていたり、ローム面の状況のよいところについても、遺構・遺物は確認されなかった。そのためこれ以上の調査は必要ないものと判断し、写真撮影、調査区の実測、埋め戻し、器材の撤収をおこない、すべての作業を終了したのは4月25日であった。

●西遺跡の試掘調査(2)

第3図 西遺跡 試掘調査(1)区全測図 (1/500)





第8図 仲3丁目 試掘調査区全測図 (1/500)

のはあまりにも有名である。縄文時代前期(おもに関山期)の集落跡や古墳時代の集落跡、さらには現在上福岡市史の編纂事業が行われているが、そのなかで権現山北古墳群と名付けられようとしている古墳群の存在にも言及しておられる。その概要は、郷土史料第2集にまとめられ、昭和40年に刊行されている。また奈良文化財研究所の先生方のご尽力によってその当時の資料が再整理され報告書が刊行されたのも記憶に新しい。上福岡貝塚は、新河岸川を崖下に望む台地の上にあり、他の時代の遺跡も周辺部に立地するなどの好環境にあった。今回の調査区は、昭和63年度に平安時代の住居跡4軒と古墳跡が見つかった調査区の南西約200mの地点にあたる。日本無線硝子株式会社が新しく工場棟を建設するというので、問い合わせがあり、社会教育課では台地が下ろうとしている地形であり、関山期の集落跡を落とした古地図によるとやや外れてはいたが、古墳時代～奈良平安時代の遺跡である滝遺跡の縁辺に接しており遺跡の可能性があるので試掘調査の必要がある旨を回答した。まず図面上で調査区の南側にある建物と土地境界にあたるコンクリート塀が直交する点を基準にして北側へ向かって2m間隔で第1～27区、同様にして向かって西側へA～O区の方眼を設定した。5月2日に重機にて南側からH I区列に該当する部分とB, C区列に該当する部分にトレンチをいれ、ローム面まで表土を除去した。その深さは2mを超えており、コンクリート塀の外側と比べて少なくとも1.5mの盛り土があると思われたが、本来の表土もかきまわしていたため区別がつかなかった。表土からは廃棄された硝子器具の破片、コンクリート塊などの瓦礫が大量



福岡新田遺跡 試掘調査作業風景 (西より)

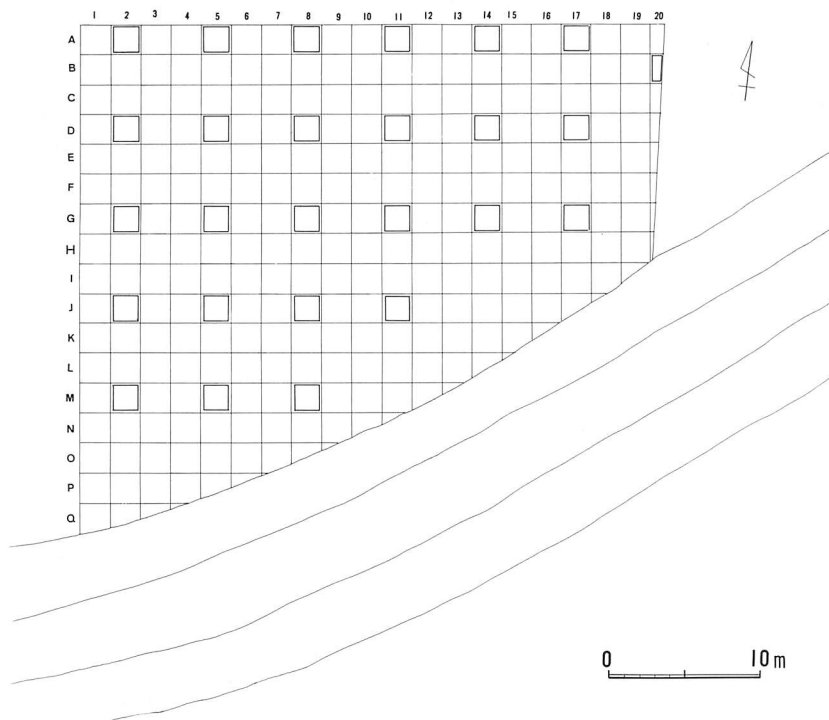


に詰まっていた、その下は直接ローム面に接していた。トレンチ内のローム面を精査していったところ、B, C区列のトレンチの中央部に焼土らしきものと茶褐色の土のある部分が見られた。その部分を精査しつつ、遺構らしきものの覆土を除去してみたところ、軟弱でありふかふかしていたうえに遺物らしきものは一切見られなかった。そのかわりにゴミが含まれており、また焼土についても限りなく現代に近いものであろうと

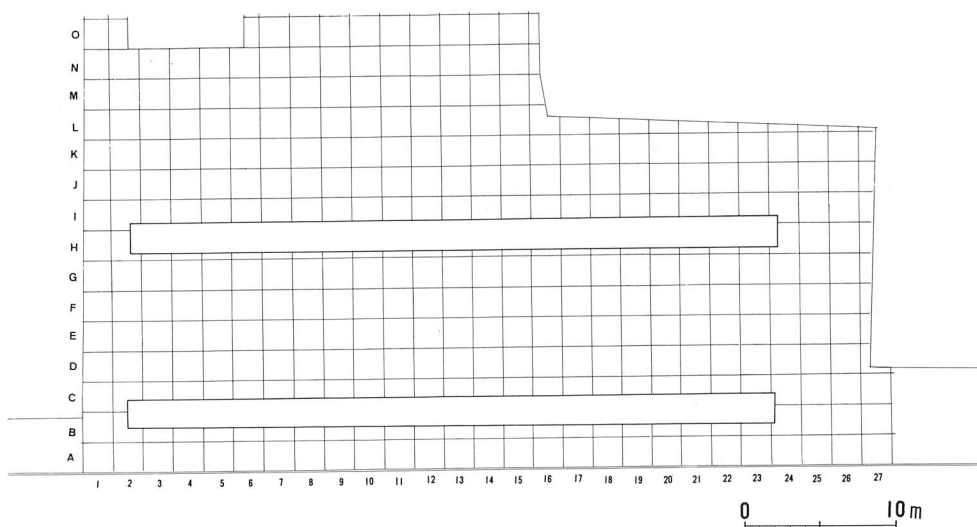
VII 松山遺跡の試掘調査

松山遺跡はこれまで、11次の調査と7回の試掘調査を実施してきた。その結果第1, 第2, 第3次調査で4軒の平安時代の竪穴住居跡を確認し、昨年度更に同時代の住居跡3軒を検出し、計7軒である。しかし地表面には、遺物の散布が見られないところ

上福岡貝塚 試掘調査作業風景 (南より)



第9図 福岡新田遺跡
試掘調査区全測図
(1/500)



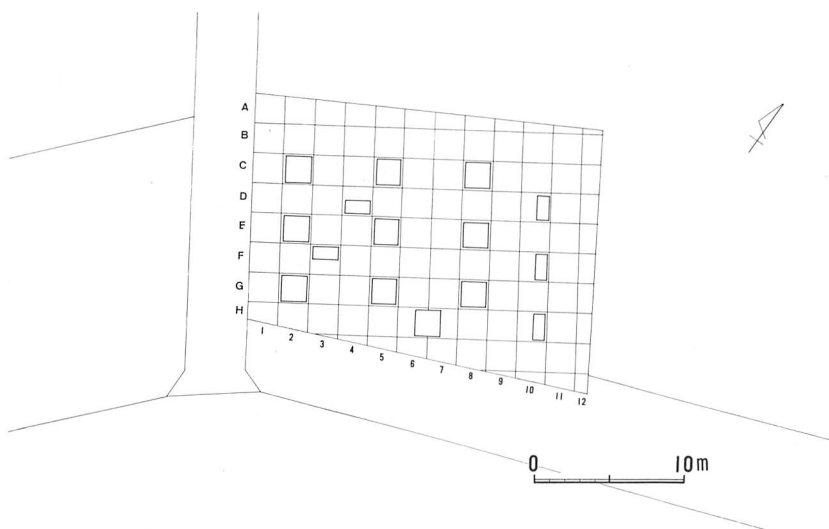
第10図 上福岡
貝塚 試掘調
査区全測図
(1/500)

がほとんどなので遺跡の範囲については明確になっていない。

今年度は、松山遺跡の範囲と考えられた8箇所調査を行った。そのうち遺構を確認したのは3箇所（第12次、第13次、第14次調査区）であり、それについては別章で述べる。

●試掘調査（1）

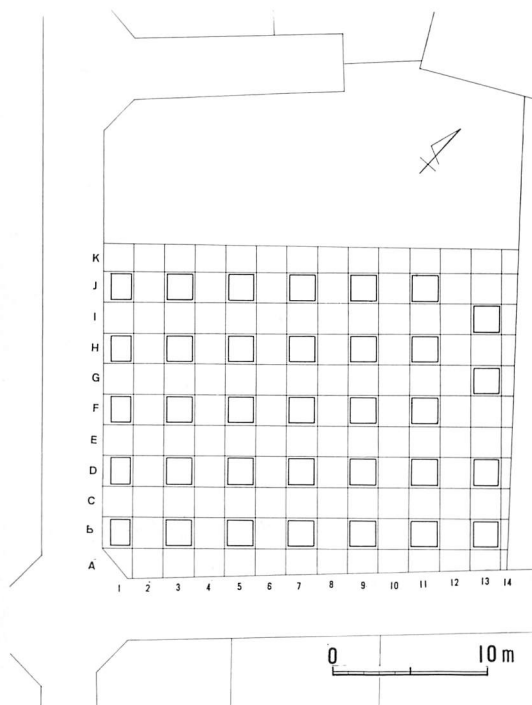
当調査区は、昭和60年度平安時代の土坑5基、大溝1条、ピット11基の確認された第6次調査区の南隣であり第3号住居跡より70mほど南にあたる。調査は4月17日に北西土地境界杭を基準にして2m間隔で東側へ向かって第1～12区、同様にして南側へ向かってA～H区の方眼を設定した第2区列、第5区列、第8区列、C区列、



第12図 松山遺跡
試掘調査(1)区全測図
(1/500)



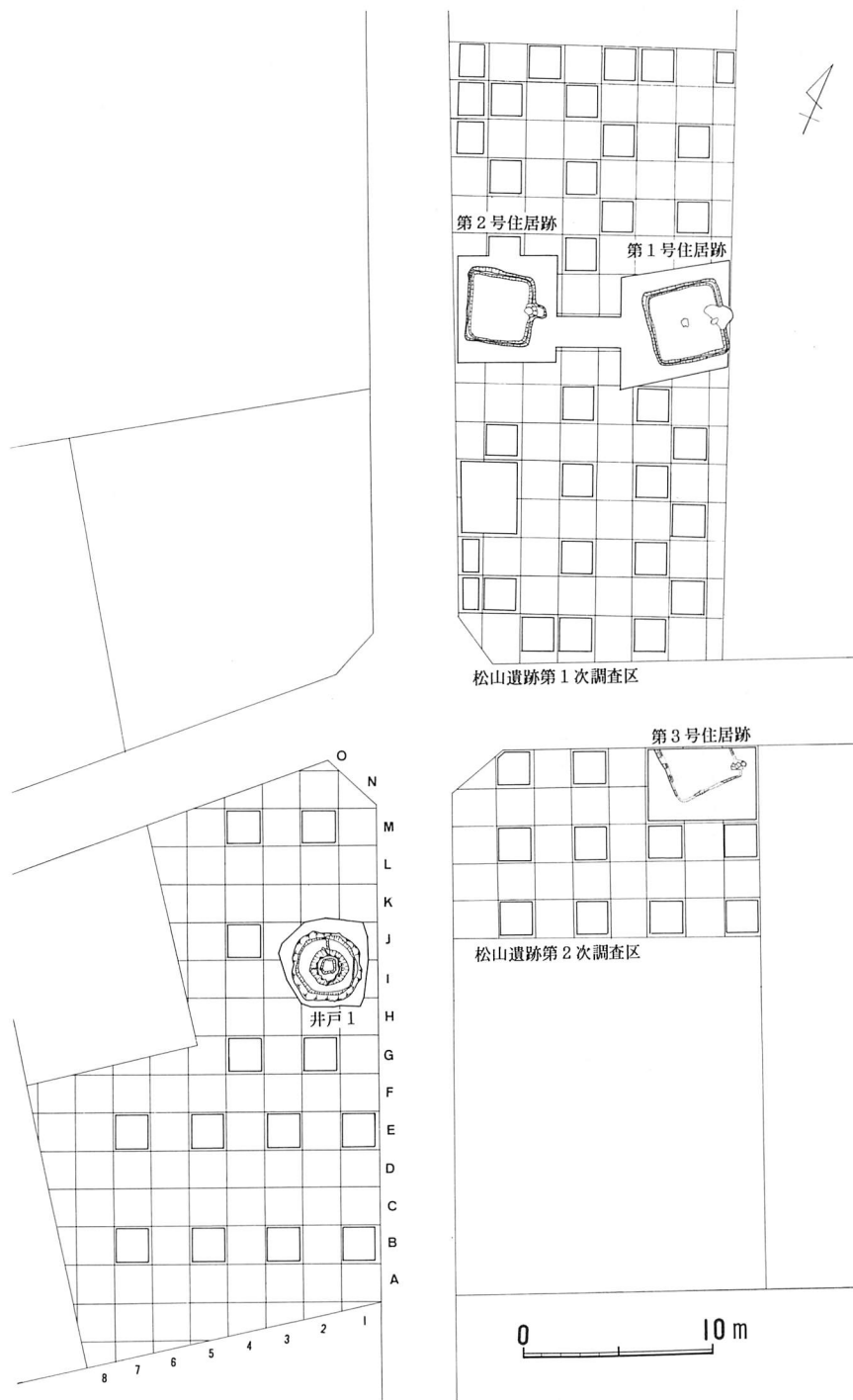
松山遺跡 試掘調査(1)作業風景 (西より)



第13図 松山遺跡 試掘調査(2)区全測図 (1/500)

松山遺跡 試掘調査(2)作業風景 (南寄り)

様にして北側へ向かってA～K区の方眼を設定した。B-1区より表土の除去を開始し、1区おきに表土の除去を行い、遺構の精査に努めながら、ローム面まで掘り下げた。この調査区では、西側のグリッドでローム面まで約25cm、第11区列で約30cm、第13区列で約50cmを計ったものと思われるが、激しく攪乱されているため傷のないローム面は、90cm～1m10cmまで掘ってようやく確認された。西側のグリッドは、25cmほどの表土層の下は、微細のものから最大5大程度のロームブロックが敷き詰められている層が90cmも続き、そのうち上層部は、黒色土を含むロームブロック層、下層部は、礫や黒色土を上層部より多く含むロームブロック層であった。同じような構造をもつグリッドは、少なくとも第9区列まで続き、第11区列では、約30cmの表土の下が約40cmのロームブロックを含んだ黒褐色土層で、その下がロームブロックを含み、粘性をもち堅い黒褐色土層が25cmほど続いてから、ローム面に到る。第13区列では約50cmの表土の下に約40cmのロームブロックを含んだ黒褐色土層となり、その下がローム面である。東側へいくに従って攪乱層は、浅くなっていると推察された。遺物はF-9区より須恵



第14図 松山遺跡第12次調査区全測図 (1/400)

また調査協力員の安全に配慮した。5月20日、井戸1を埋め戻して、器材を撤収し、すべての作業を終了した。

●井戸1

確認面での直径は約3.5m、井側部分の上面は約2m、井側部分の底面は約1.1~1.4m、井筒0.8mである。深さは、確認面から井側上面まで約60cm、井側上面から底面まで約1.7m、井筒は約70cmであって、確認面より井筒底面までは約3mである。井側と井筒は連続せず井側底面に10cm大前後の石が敷いてあり、また、馬の頭骨が井側底面南側より出土した。時代や遺構は異なるが茨木市郡遺跡、藤井寺市国府遺跡、八尾市中田遺跡の特殊土坑、上福岡市周辺では、所沢市東ノ上遺跡第11次調査区第1号住居跡、日高市若宮遺跡第3次調査の溝跡で見つかっており、井戸に関する信仰か、あるいは漢神信仰に伴う神事に使われたものと推察される。広くは高麗郡、新座郡との関連など朝鮮渡来系の文化との関係がうかがわれる。また、井筒の木枠が残っていたので取り上

器片が確認されている。おそらく東側より攪乱によって運ばれてきたものと思われた。5月11日までに調査区の実測、埋め戻し、器材の撤収をおこないすべての作業を終了した。

VIII 松山遺跡第12次調査

今回の調査区は、第1次調査区の道路を挟んで南西隣でかつ第2次調査区の西隣にあたる。そのため遺構とそれに伴う遺物を確認するために調査を行った。5月12日に南東土地境界杭を基準にし、道路に沿った境界線を2m間隔で北側に向かってA~O区、西側へ向かって第1~8区の方眼を設定した。図のようにB、E、G、J、M区列を西側に向かって1区おきに表土を除去し、ローム面まで掘り下げた。するとJ-2区のみローム面が確認されず須恵器片が集中的に採取された。そのためJ-2区の周囲の拡張を行い、遺構のプランの確認に努めた。ローム面を精査した結果、遺構はまるみを帯びているように思えたが2.5m×3.5mの住居跡と当初は推察した。しかし覆土除去作業を行っていくうちに1m以上も掘り下げても覆土の性質こそ変化するが床面が確認できなかった。覆土を60cmほど除去するとややなめらかに20cmほど遺構の中心へ向かって傾斜していき、次に円柱状に深くなっていく様子から井戸であろうと考えられた。そのためこの遺構を井戸1とした。井戸1の本調査は第13次調査区の試掘調査と並行して行った。本調査にあたっては井戸が狭い遺構であるためハシゴを用いて調査を行い、